

「保育」の原点 117

授乳期の態度が大切です

文

葛西得男

text by Tokuo Kassai

幼 児や学童の間で、あまりにも落着きのない子というのが問題になっていきます。落ち着きや集中力は、子供がその能力を十分発揮していくうえで、とても重要なものです。

この力が弱くなっている原因は、けっして一つではないと思いますが、私は、その主な原因の一つとして乳児期の栄養法が幼児期まで響いていると考えています。

もうだいぶ前のことになりましたが、NHKのラジオ番組で、産声から言葉の誕生までを五年間にわたって追跡したことがあります。そのときスタッフの方は、母乳育ちと人工栄養育ちとは赤ちゃん時代その神経の反応のタイプが、大きく分かれるのにびっくりしていました。

私は母乳栄養の赤ちゃんは、だいたい落ち着いていることを感じていましたが、スタッフの方々は実際に人工栄養の赤ちゃんに母乳栄養の赤ちゃんに接してみても、みなさんが「なるほど」と感心なさったことが忘れられませんでした。

新生児でも、世話をしてく

れる人の気持ちを敏感に受けとめます。生後3カ月を過ぎた赤ちゃんは、さらに感受性を深めています。あやしたり、世話をする人の気持ちが伝わるのです。赤ちゃんの脳は、周囲の人々とかかわりながら育っているのです。脳の発育をもっとも促進するのは直接世話をする人の態度です。

母親は乳をふくませながら、「鼻は私に似たのかしら、目は父親？もしかしたらおばあちゃん似かな」なんて赤ちゃんと目と目を合わせながら楽しんでいるわけです。こういうときの気持ちはとてもおだやかなものです。ところが人工栄養はびんの中身が見えます。「きょうも飲み残すかな、もうちょつと飲まないと標準以下だわ、あと十ccよ」と与える人の気持ちはけっして和やかではありません。目をみるどころか、目盛りを見つめるのです。それにつられて赤ちゃんも緊張するわけです。

それで、赤ちゃんはそれぞれの母親の態度を敏感に感じて、母乳育ちの赤ちゃんはのんびりと、人工栄養育ちの赤ちゃんは緊張しやすくなるのですが、ただ母乳と人工栄養でかならず二つのタイプに分かれるというわけではなく、

ここで注意していただきたいのは、授乳の時のお母さんの態度です。緊張が続くなかでは、落ち着きや集中力は育ちにくいのです。学童になって落ち着きが急になくなつたのではなく、多くの場合は、赤ちゃんのときからそのような育てられ方をしてきた結果と考えられます。

『育児の原理』より

Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
1975年に帰国後、アプリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人 松稲会 理事長に就任。
松稲会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アプリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
アプリカ葛西 副社長時代に国連環境計画（UNEP）のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。



内藤寿七郎著
『育児の原理』

